

令和元年6月13日現在

機関番号：12102

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K02397

研究課題名(和文)近代日本の人文知形成と新聞小説 森田思軒の翻訳と大英帝国の情報ネットワーク

研究課題名(英文)The Newspaper Novels by Shiken Morita and Circulation of Stories in the Late 19th Century British Empire

研究代表者

馬場 美佳 (BABA, Mika)

筑波大学・人文社会系・准教授

研究者番号：90405548

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、19世紀末、明治中期における新聞小説の位置付けについて再考することを目指したものである。とくに、森田思軒が『郵便報知新聞』に掲載した大量の原著不明作品に注目した。それらの多くがイギリスを中心としたアメリカ・オーストラリア・ニュージーランド等の大英帝国の文化圏の英字新聞に掲載され流通していた物語と一致していた。ここから、新聞に小説を掲載することが、新聞の編集という行為と密接であり、それが日本人読者の人文知の形成を促す志向をもっていたことが明確になった。『郵便報知新聞』のみならず、明治期文学者と新聞編集という観点から、改めて日本の近代文学のあり方を評価する視座を得ることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

従来、文学の翻訳と原典との関係は書籍を中心に検討されてきたが、19世紀後半特有の大英帝国文化圏における物語流通を視野に入れ、新聞メディアを新たな調査範囲とすべきと提案できた。また、日本の文学と新聞との関係は大変密接であるにもかかわらず、従前の文学史において新聞小説そのものは大衆的・通俗的だと批判されざるを得なかった。しかし、明治期の文学者たちは新聞編集に積極的にかかわっており、なにより彼らの文学創作および翻訳の前提であり、基盤をなしていることがわかった。今後、そうした営為の総体を改めて評価することで、日本的な文学・文化の近代化の様相を再検討できるのではないかとという新たな視座を得ることができた。

研究成果の概要(英文)：This study aims to reconsider the positioning of newspaper novels in the Meiji period. In particular, I paid attention to a large number of original works unknown by Morita Shiken in the "Yubin Hochi Shimbun".

Many of them were consistent with the stories published and circulated in English newspapers of the British Empire's cultural area such as the United States, Australia, New Zealand, etc., centered on Britain. From this, it became clear that publishing a novel in a newspaper was closely related to the act of editing the newspaper, and that it had an intention to promote the formation of human literacy of Japanese readers. Not only "Yubin Hochi Shimbun" but from the perspective of Meiji literary and newspaper editing, I could get a view to evaluate the way of modern Japanese literature.

研究分野：日本近代文学

キーワード：森田思軒 明治文学 新聞小説 新聞編集者 翻訳 郵便報知新聞 物語流通 ジュール・ヴェルヌ

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

研究代表者は『小説家』登場『尾崎紅葉の明治20年代』(2011年)において、尾崎紅葉にとっての『読売新聞』という媒体の意味を考察した。とくに明治23年頃、紅葉が意識していたのは、矢野龍溪が主宰する『郵便報知新聞』であった。龍溪の新聞連載小説「報知異聞/浮城物語」は啓蒙的な冒険小説として近代文学の周縁に位置付けられてきたが、紅葉の動きを見る限り、むしろ拮抗している。自由民権運動の終焉とともに大新聞・小新聞が解体し再編されたこの時期、新聞と小説をめぐる、通説とは異なる独特な状況があったことを想定する必要があると考えた。

そこで注目したのが、明治19年に龍溪が行った『郵便報知新聞』の紙面改革である。このとき中新聞化した『郵便報知新聞』は、改革により飛躍的に部数をのばし、明治21年には東京の新聞として最大の発行数を実現した(野田秋生『大分県先哲叢書・矢野龍溪』1999年)。この改革の目玉として「新聞小説」を掲載するための「嘉坡通信/報知叢談」欄が設けられた。当時の告知によれば「社友九名」が交代に「三四日読切りの小説を訳述し又は自作し匿名にて之を本誌上に載する」というもので、明治19年10月1日より22年末までに30作が掲載された。だが、最初の2作は社長にして主筆の龍溪が参加しているものの、以降ほとんどが思軒による翻訳であったことが『明治翻訳文学全集翻訳家篇5 森田思軒集』(2002年)等の検証により判明している。そして同書所収の年表によれば、この内、原著不明なものが19作、「嘉坡通信/報知叢談」と銘打たなくなった明治23年以降の思軒による匿名の翻訳新聞小説を含めると21作となる(『郵便報知新聞』以外の媒体に掲載された原著不明作はさらに3作ある)。

これらについて、新聞紙面と小説との相関性に関する論はあった(柴原文和『嘉坡通信報知叢談』論、2009年)。だが原著不明ゆえに、思軒たちの試みの実態を見定めることは困難であった。研究代表者は、H23-24年の間に約半年ロンドン大学東洋アフリカ研究院(SOAS)の日本研究センターにおいて客員研究員として、さらにH25-27年度・挑戦的萌芽研究の課題として、『郵便報知新聞』掲載の思軒作品の原著調査をロンドン大学総合図書館および大英図書館にて実施した。これら基礎調査では、それまでの通説を検証する作業を経て、全く新たな視点から、13作の原著を発見することができた。

結果、思軒が英米の当時著名な作家の文学作品を翻訳すると同時に、多くの海外諸新聞に掲載された無署名の記事を翻訳し小説として紹介していたことを明らかにした。しかもそれらが、英米のみならず、オーストラリア、ニュージーランド、カナダ等の各国において、複数の雑誌や新聞でときに編集を加えられながら転載されてもいるものであった。これらの実態について具体的に調査をすすめていくことが必要であった。

2. 研究の目的

本研究の目的は、これまでに行ってきた基礎調査を継続して完成させ、さらに明らかになった原著と思軒訳との関係について、それぞれの作品を歴史的・国際的な状況下において具体的に位置づけ直すことである。そして、明治日本が情報化するなかで、世界的な人的・物的動向をどのように取り入れようとしたのかを考察し、近代日本の人文知形成の軌跡を、新聞メディアにおける新聞小説ひいては日本近代文学の展開の状況を通して描くことを目指した。より詳細な目的は以下のように設定した。

(1) 森田思軒訳『郵便報知新聞』掲載のすべての作品の原著の解明

研究代表者がH25-27年度・挑戦的萌芽研究で行った基礎調査によって、思軒の原著不明作品が書籍をもとにするという先行説を再考し、多くが海外諸新聞の記事であるという事実にたどりついた。これにより、諸国の海外発行新聞にあたりつつ原著を明らかにする作業行程を確立することができたので、これを継続すること必要があった。とくに欧米の定期刊行物に関する研究環境整備は日進月歩であり、様々な文献へのアクセスが年々可能になっており、その発展を常に視野に入れつつ継続的に作業することで、基礎調査部分を完成に近づけることを目指すこととした。

(2) 国際的視野に立った森田思軒訳『郵便報知新聞』掲載の新聞小説/翻訳小説の位置づけ

思軒が訳出した新聞記事を原著とする小説が、イギリスを主とした国のどのような背景において書かれたもので、その後どのような媒体に転載されていったかを明らかにすること。著作権意識が普及していない時代において、宗主国発信の記事/小説が植民地へと形をかえて伝播する、しかもいくつもの編集を経ながら各国内で複数のメディアに掲載される新聞・雑誌をはじめとする刊行物が急速に発展していった時代におきた独特の状況に、『郵便報知新聞』という日本の新聞メディアがどのように参入することになったのかを、国際的な視野にたって位置づけていくことを目的とした。

(3) 国内における森田思軒訳『郵便報知新聞』掲載の新聞小説/翻訳小説の目的の解明

これまでに原著が判明した分の小説を通して、思軒ら『郵便報知新聞』が、海外の状況の何を捉え、どのような人文知として置換し、読者に提供していったかを考察する。そしてそれが同時代の文学者たちにどのような文学観・新聞小説観を与えることになったのかを明らかにすることを目指した。『郵便報知新聞』は、当時、知識人間にもっとも購読者を獲得していた新

聞ゆえに、その影響力は看過できないためである。

3. 研究の方法

本研究は、日本近代文学の成立研究を起点にしたものだが、用いる方法は多岐にわたる。まず翻訳小説の原著を明らかにし位置付けるといった比較文学的手法、さらには新聞という近代の先進的な刊行物を対象とするメディア論的手法、さらに日本のみならず国際的な状況をふまえるための学際的な手法。従来、翻訳小説として扱う場合も、新聞小説として扱う場合も、いずれも国内の状況に限定して論じられてきているが、研究対象の実状にあわせ複数の角度からアプローチした。

(1) 海外での調査のための事前準備（全調査期間を通じて）

海外調査の視野をより広くもつため、継続して19世紀後半の欧米を中心とした新聞研究および定期刊行物研究に関する国内・外における研究を継続的に精読していった。

(2) 海外での文献調査

第一回海外調査（2016年度）

フランス（パリ）国立図書館にて8日間、イギリス・大英図書館にて14日間、文献調査を実施した。

第二回海外調査（2017年度）

イギリス・大英図書館にて10日間、文献調査を実施した。

第三回海外調査（2018年度）

フランス（パリ）国立図書館にて6日間、イタリア（ローマ）国立図書館にて6日間の文献調査を実施した。

(3) 国内での文献調査

2018年度より、岡山県笠岡市立図書館寄託・森田思軒関連書簡の調査を開始した。また随時、国立国会図書館・神奈川県立図書館において、明治期の新聞資料調査を行った。

(4) 具体的な作品を例とした調査方法について

作品が多数に及ぶため、ここでは調査の方法の一部を例としてあげたい。

特定の作家による原作が雑誌に掲載された後、1870年代から1900年初頭にかけて各国の新聞記事として編集・転載された「女旅客」=「A Queen's Adventure」(R. Davey)をはじめ、「右足」=「The Leg」, 「密封書」=「The Sealing Instruments」, 「元日」=「My New Year's Case」, 「猫」=「Staying at the Night」, 「倫敦辻馬車」=「A Pound Minute」といったこれまでに研究代表者が原著を明らかにしたものについて、19世紀を中心とした定期刊行物との関係、さらには、イギリス・アメリカ・オーストラリア・ニュージーランド・カナダ、そして日本をめぐる新聞紙上での掲載の時期、内容の変容、媒体における位置づけなどを調査・分析し、最終的に思軒訳がどのような国際的な状況を見据えたものになっているのかを明らかにした。

たとえば「女旅客」の場合、比較すべき文献として明らかになっているものは、最終的な調査時点では、単行本1冊、雑誌2種（米1誌、英1誌）、新聞18種（米11紙、英1紙、オーストラリア2紙、ニュージーランド3紙、カナダ1紙）と、思軒訳を含め、合計22種のテキストであり、今後も各国の新聞データベースの整備によってさらに発見しうる可能性がある。

一作ごとに、こうした広がりをもつ研究となることが予想されるため、海外にて調査および文献収集、日本にてデータの入力および分析という流れを作り、できるだけ効率よく進めていくことを心がけた。また、いまだ原著不明な作品についても、並行して調査を進めた。

4. 研究成果

「2. 研究の目的」の各項目にそって、研究成果を以下に報告する。

(1) 森田思軒訳『郵便報知新聞』掲載の作品の原著の解明（追加調査あり）

書籍・雑誌・新聞記事をふくめ、それぞれからさらに原著を発見し追加することができた。想定外であったことは、思軒は完訳を行っていることとされ、本調査でも同様の傾向を確認してきたが、最も初期の原著不明作「印度太子舎摩の物語」については、複数の外国作品を編集したものであることが判明した。とくに2017年度の海外調査によってその複数の原著すべて（3作品＝ウージェーヌ・シュー1作、ジュール・ヴェルヌ2作）を明らかにすることができた。これにより、従来定説となっていた思軒によるジュール・ヴェルヌ紹介時期なども更新できた。

その他、『郵便報知新聞』以外に掲載された思軒翻訳の原著不明作についても調査し、内2作について原著をあきらかにすることができた。これにより、思軒が海外英字新聞に掲載された小説を随時参照していた可能性が高まった。

最終年度では、過去の調査で判明した原著不明の作品について、各国の新聞データベースの充実と進展をみすえ、改めて再調査し、成果の精度をあげた。そのうち「女旅客」についての成果を『比較文学』に投稿し採択された。

これまでの調査の方法の独自性をその過程についての報告を学会誌（『日本近代文学』）に投稿し採択された。

- 『郵便報知新聞』掲載原著不明作の内、新規に原著が明らかになったもの
- ・「印度太子舎摩物語」 Eusine Sue 「The Wandering Jew」 & Jules Verne 「The Adventures of three Englishmen and three Russians in South Africa」 & 「Dick Sand」
 - ・「まちがひ」 Furley 「An error in Judgement」

- その他の媒体掲載原著不明作の内、新規に原著が明らかになったもの
- ・「毛家荘秘事」 John Estan Cooke 「The Maurice Mystery」
 - ・「白蓮庵雑話・にはか盲」 無署名記事 「Blind」
 - ・「海賊」 Jules Verne 「The Archipelago on Fire (仏語原題 L'Archipel en feu)」

(2) 国際的視野に立った森田思軒訳『郵便報知新聞』掲載の新聞小説 / 翻訳小説の位置づけ

大英帝国文化圏における物語流通との関連との関連

思軒が訳出した新聞記事を原著とする小説が、イギリスを主とした国のどのような背景において書かれたもので、その後どのような媒体に転載されていったかについての調査は、国際的な新聞小説研究を鑑み、背景に英米を中心とした国際的な小説配給会社との関わりを検討した。しかし、それには該当せず複数の国や媒体による無断掲載・無断翻訳といった19世紀的慣習が問題になることがわかった。宗主国発信の記事 / 小説が植民地へと形をかえて伝播する際、各国の新聞における小説の扱い方、さらには編集方針などの個別性もあり、編集という文化的行為の多様性の中で、思軒の翻訳行為の再考が必要になることが明らかになった。

ジュール・ヴェルヌ作品を媒介とした国際意識と独自の新聞編集方針との関係

ジュール・ヴェルヌの作品が用いられていることの意味を再考する契機を得た。ヴェルヌの物語に登場する科学的知見や国際社会の問題などが、矢野龍溪と思軒が渡英していたときのイギリスのジャーナリズム（新聞・雑誌）とも通じていることが明らかになると同時に、新聞記事と新聞小説を連動させるという発想は欧米にはなく、『郵便報知新聞』独自の新聞編集方針であることが明確になってきた。

思軒の外遊と各国新聞編集の関係

思軒は龍溪とともに『郵便報知新聞』の紙面改革のために欧米諸国を調査している。今回、イタリアの国立国会図書館での調査では思軒他著『西洋風俗記』（明治19年）にみえる『郵便報知新聞』の編集についてイタリアの新聞を参考にしたとの記述を検討し、紙面構成の類似性を見出すことができた。

(3) 森田思軒訳『郵便報知新聞』掲載の新聞小説 / 翻訳小説の目的の解明

原著不明作が大量に発生した背景

思軒らが編集する『郵便報知新聞』が、欧化主義的な時代を背景に、総合新聞ではなく、むしろ海外事情に特化し、読者を限定する傾向をもった新聞として再出発をはかろうとしていたことが、原著不明作品群の問題を引き起こしていた。それは新聞記事と続き物が渾然一体とした明治初期の紙面作りとも、近代以降主流になる新聞における小説欄の独立という方向性とも異なる、新聞改良期固有の志向であること。

思軒翻訳と新聞編集という営みの関係

『郵便報知新聞』で新聞編集者として翻訳にかかわった後、明治25年から『国会』で主筆となった時期までを視野におさめて考察を開始した。これによって、思軒の新聞小説にかんする思想がより明確になった。とくに思軒が特定の雅号を用いて英字新聞記事を翻訳して用いることが判明し、これにより思軒が新聞という場において何を試みようとしていたのかという彼の志向について論じる視座を得た。

思軒と新聞編集の実態解明に向けて

笠岡市立図書館における思軒関連書簡には報知社関連の書簡が多々含まれており、これまでの研究を新聞編集の問題として改めて捉え直す必要性に気づくことができた。二千通に及ぶ書簡の本格的な内容解明は次の課題に引き継ぐこととした。

三年の調査期間のなかで、思軒の原著不明作調査にとどまらず、その経緯をめぐる歴史的・国際的背景の解明にまで拡張する研究を行い、近代文学・比較文学を代表する学会において成果を公表することができた。今後は、思軒関連書簡による事実確認を行っていき、同時に、新聞と文学の親密な関係を生きたほかの明治期文学者たちについても、文学者にして新聞編集者という側面から、その文化的・芸術的営みの意義を再考していきたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計2件)

馬場 美佳、十九世紀後半の大英帝国文化圏における物語流通と『郵便報知新聞』 R・

デイビー著「王妃の冒険」から森田思軒訳「女旅客」へ、比較文学、査読有、第 61 巻、2019、28-44

馬場 美佳、新聞編集者・森田思軒と漂流する物語 『郵便報知新聞』掲載、原著不名作の調査から、日本近代文学、査読有、第 97 集、2017、104-112

〔学会発表〕(計 1 件)

馬場 美佳、新聞小説のはじめ方 『郵便報知新聞』における森田思軒の模索、2016/12/17、幕末明治研究会、於明星大学(東京都日野市)

6. 研究組織

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。